

僕は此んな事を言ひながら、門江女史と三人で近所の錢湯に連れられて行つた。

熱湯を隠部に注いで、火傷した程痛かつた。

大きな聲で、觀音經をドナツた。

『支那蕎麥を食ふか？』

ゴツい布團を敷いてくれる。

僕は床の中で、半分ばかりソバを食ひ掛けにしてねた。

四時頃に目が覺めた。

『まだ早いから、騒がすねてゐろ』

襖の向ふから辰公がドナる。

門江女史は態々ねまきのまゝで、チャンチャンを持つて來て、寒いから着なさいと言ふ。

僕はキツク門江女史の手を掴んだ。

出掛けようとするのを止めるから、力強く狂的に振り拂ふ爲に握つたのだ。

キアツと叫んで門江女史は、辰公の床へかけ込む。